

# 友人関係・課外活動の動機づけと 学業の重要度、動機づけの関連の検討

赤 間 健 一

高校生までに比べると、大学生は毎日、終日授業があるわけではなく、また一年の間に授業のない期間も長くなり、生活の中で授業以外の活動に使う時間が増加するだろう。赤間(2012)は、現在の大学生が主要な生活領域は、授業、友人関係、趣味、部・サークル、アルバイトの5つに分類され、多くの学生が3つ以上の領域を自身の生活領域としており、中でも授業と友人関係が重視されていることを示した。

また、赤間(2012)は、生活領域の中で、大学における授業を重視している程度が、授業に出席する動機づけの程度に影響しているかを検討した。その結果、特に重要度が最も低い場合において、上位に位置付けている場合に比べて自律性が低く、自己効力感も低く、達成目標も弱く、重要度が生活領域の中で最低である場合において多面的な動機づけの低さが示された。ただし、程度に違いはあったものの、達成目標の中では、知識や技術の獲得、増大を目指す熟達接近目標(Elliot & McGregor, 2001)が最も強く、自律性に関しても、活動の価値、重要性を認め、自身の中に取り込んでいる高自己決定的外発的動機づけ(田中・山内, 2001)が高いなど、動機づけとしては望ましいと考えられるパターンは同一であった。そのため、動機づけ自体が弱いことのみが問題であり、動機づけを高めることができればよいと考えられた。さらに、授業の重要度によりこの違いが生まれていたために、授業の重要度を高めることで動機づけを高めることができる可能性が示唆された。重要度を高めるための関わり方、あるいは重要度を高めることができる授業方法の開発が求められるだろう。

しかし、重要度を高めることで動機づけを高めようとする場合に考慮す

べき問題もある。学業の重要性を高めることで、他領域の活動の重要性が低下すること、またそれによりその領域における動機づけの低下などの弊害がないとも言い切れない。そのため、学業領域の重要性と学業領域の動機づけだけでなく、他の活動領域における動機づけについても考慮する必要があるだろう。

学業以外の領域においても動機づけは研究されている。例えば、友人関係(岡田, 2005, 2008), スポーツ(藤田, 2010), 労働(VandeWalle, Cron, & Slocum, 2001)など様々な領域において動機づけ研究は行われているが、いずれも単一領域のみの動機づけについて検討したものがほとんどで、複数の領域間の動機づけの関係に関しては言及されていない。そのため、複数の領域間の動機づけは独立しているのか、それとも相互に影響し合っているかということも検討する必要がある。独立であるならば、これまでに行われてきた研究同様に關心のある領域の動機づけのみに注目すればよい。しかし、様々な活動領域の動機づけが相互に影響し合っているならば複数の領域の動機づけを同時に考慮することが必要となるだろう。また複数の領域の動機づけを同時に考慮することで、これまでの領域別の知見を統合し、動機づけ自体や動機づけの影響を考える際の新たな視点や、動機づけの維持・高揚のための方法に関する示唆が得られるかもしれない。

そこで本研究では、大学生の動機づけの特徴の理解、および動機づけへの働きかけを考える際の方法を提案するための基礎となる情報として、赤間(2012)で示された大学生の主要な活動領域として、学業、友人関係、そしてそれ以外の活動の3つの活動領域を対象とし、3つの活動領域の動機づけの関係を明らかにすることを目的とする。

まず、赤間(2012)が示した学業領域における動機づけと同じように、友人関係や他の活動などの領域においても重要度と動機づけに関連があるかどうかを検討する。さらに、学業の重要度によって、各領域の動機づけの程度が異なるかどうかとも検討する。例えば、学業の重要度が高い場合に、重要度が低い他の領域における動機づけが低い状態にあるのであれば、単

純に学業の重要度を高めることで学業に対する動機づけが高まるので、重要度を高めればよい、とはいえないだろう。しかし学業の重要度の高さは他の領域の動機づけの程度には影響していないのであれば、学業の重要度を高めることを学業領域の動機づけを高めるための方法として利用できるといえるだろう。

また、各領域における動機づけ間の関連についても検討する。例えば、Tanaka, Okuno, & Yamauchi(2002)や赤間(2011)は、どのような達成目標を持つかということについて学業領域における有能感や達成動機以外に社会的有能感や社会的勢力のような社会的要因からも影響を受けることを示している。また、自己決定理論においても、自律性を高める際に、他者との関係性が影響する可能性が示されており(長沼, 2004)、学業領域における動機づけを考える際に、友人関係など他領域の動機づけを考慮する必要性があるかもしれない。そのため、学業における動機づけと他領域の動機づけに関連があるのか、さらには関連のあり方が学業の重要度によって異なるのかも検討する。

## 方 法

**調査参加者** 大学生182名(男性95名, 女性87名, 平均年齢20.2( $SD=2.4$ )歳)が調査に参加した。

**調査内容 学業領域：達成目標** 田中・山内(2002)の尺度を使用した。熟達接近目標(「授業で教えられた事柄は完全に習得したい」など3項目)、熟達回避目標(「学習をする時には、学ぶべきことの全てを学んでいないのではということがよく気になる」など3項目)、遂行接近目標(「他の人より良い成績をとるということは私にとって大切である」など3項目)、遂行回避目標(「私が学習する目標は成績が悪くならないようにすることである」など6項目)の計15項目を使用した。1)当てはまらない、から5)当てはまる、までの5件法で評定を求めた。

**授業への出席に対する自己決定尺度** 赤間(2012)の授業への参加に対する自己決定尺度を使用した。内発的動機づけ(「授業に興味を持っているから」など4項目)、高自己決定的外発的動機づけ(「授業に出席することが私の将来のためになるから」など4項目)、低自己決定的外発的動機づけ(「授業に出席することは当然しなければならないことだから」など8項目)の計16項目を使用した。1)当てはまらない、から5)当てはまる、までの5件法で評定を求めた。

**自己効力感** 学業領域においては Akama(2006)の尺度を使用した。「授業でよい成績をとることができると思う」などの4項目からなり、1)当てはまらない、から5)当てはまる、までの5件法であった。

**対人領域：自己決定感** 岡田(2005)の友人関係への動機づけ尺度を使用した。内発的動機づけ、同一視的調整、取り入れの調整、外的調整の4つの下位尺度について各4項目、計16項目を使用した。1)あてはまらない、から5)あてはまる、までの5件法であった。

**自己効力感** Tanaka, Okuno, & Yamauchi(2002)の社会的有能感尺度4項目を使用した。1)あてはまらない、から5)あてはまる、までの5件法であった。

**他の活動領域**：学業と友人関係以外に重視している活動領域を一つ想起し、記入を求めた。

記入した活動領域における自己決定感と自己効力感を測定した。使用した尺度は、学業領域で使用した尺度の「授業」という表現を、「その活動において」と変更し使用した。

**重要度** 日常生活において授業、友人関係、他の活動の3つ活動領域について重要だと思う順位を決め、順位を記入させた。

**手続き** 授業終了後に調査内容について、各自のペースで回答を求めた。

## 結 果

各尺度の項目に対する評定値を合計し、項目数で割り尺度得点を算出した。友人関係の動機づけは、外発的動機づけが3尺度からなる尺度であったが、学業と他の活動とそろえるために、高自己決定的外発的動機づけと低自己決定的外発的動機づけの2尺度に統合した。友人関係の動機づけも含めて、各尺度の $\alpha$ 係数は.66から.87と信頼性は十分であった。また、各領域を重視する人数をTable1に示した。最も重視する領域として友人関係が多く、次いで、授業、他の活動であった。

Table1. 各領域における  
重要度の評定

	学業	友人関係	他の活動
1位	42	112	28
2位	79	45	58
3位	61	25	96

### 1. 各領域の重要度による動機づけの差

**分析方針** 友人関係とその他の活動において、赤間(2012)が学業領域において示したように、領域の重要度により自律性、自己効力感に差が生じているかどうかを検討するために、重要度を被験者間要因とし、自己効力感に対しては一要因の分散分析を、自律性に対しては重要度(1位・2位・3位)×自律性(内発的動機づけ・高自己決定的外発的動機づけ・低自己決定的外発的動機づけ)の二要因分散分析を行った。主効果が有意であった場合の多重比較にはBonferroni法を用いた。

#### 1-1. 友人関係

分析の結果、自己効力感に対して重要度の主効果が有意ではなかった

( $F(2, 179) = 1.78, n.s.$ )。友人関係の自己効力感は重要度に関係なく一定であった。

自律性に対しては、重要度の主効果が有意であった( $F(2, 179) = 18.36, p < .001$ )。自律性の主効果( $F(2, 358) = 212.51, p < .001$ )、重要度と自律性の交互作用( $F(4, 358) = 2.62, p < .05$ )も有意であった。交互作用が有意であったので下位検定を行った。重要度の各水準における自律性の単純主効果の検定を行った結果、1位( $F(2, 179) = 19.28, p < .001$ )、2位( $F(2, 179) = 9.74, p < .001$ )、3位( $F(2, 179) = 4.61, p < .05$ )のすべての順位において自律性の単純主効果が有意であった。そのため多重比較を行った結果、1位と2位では、すべての動機づけ間の差が有意で、内発的動機づけ、高自己決定的外発的動機づけ、そして低自己決定的外発的動機づけの順に動機づけが低くなっていた。3位では、内発的動機づけと高自己決定的動機づけの間に有意差がなく、それらより低自己決定的外発的動機づけが有意に低かった。自律性の各水準における重要度の単純主効果の検定を行った結果、内発的動機づけ( $F(2, 358) = 260.30, p < .001$ )、高自己決定的外発的動機づけ( $F(2, 358) = 66.27, p < .001$ )、低自己決定的外発的動機づけ( $F(2, 358) = 33.38, p < .001$ )のすべてにおいて重要度の単純主効果が有意であった。そのため、多重比較を行った結果、内発的動機づけにおいては、すべての重要度間に有意差が認められ、重要度が高いほど動機づけが高かった。高自己決定的外発的動機づけにおいては、1位と3位の間に有意差が見られ、1位の方が高自己決定的外発的動機づけが高かったが、2位は1位、3位のいずれとも有意差はなかった。低自己決定的外発的動機づけにおいては、1位と2位の間に有意差はなく、1位、2位よりも3位の動機づけが低かった。以上から、友人関係に対する動機づけは、重要度が1位と2位においては内発的動機づけが最も高く、次いで高自己決定的外発的動機づけ、3位の場合にはこの両動機づけには差がなかった。またどの重要度であっても低自己決定的外発的動機づけが最も低かった。各動機づけの強さは、重要度が高いほど高い傾向があることが示された。

## 1-2. その他の活動

分析の結果、自己効力感に対して重要度の主効果が有意であった( $F(2, 179) = 5.03, p < .01$ )。重要度が2位と3位の自己効力感には有意差は見られなかったが、2位、3位に比べ1位の場合に自己効力感が有意に高かった。

自律性に対しては、重要度の主効果( $F(2, 179) = 4.30, p < .05$ )、自律性の主効果( $F(2, 358) = 170.27, p < .001$ )が有意であった。重要度と自律性の交互作用は有意ではなかった( $F(4, 358) = 1.58, n.s.$ )。多重比較の結果、重要度においては、1位と3位の自律性に有意差が見られたが、1位と2位、2位と3位の間の差は有意ではなかった。自律性に関して、内発的動機づけが最も高く、次いで高自己決定的動機づけ、低自己決定的動機づけの順に有意な差が見られた。以上から、自己効力感は最も重視している場合には、2位以下に位置付けている場合よりも高く、自律性については、友人関係と同様に、内発的動機づけが最も高く、次いで、高自己決定的、低自己決定的外発的動機づけという順であり、その程度は、重視しているほうがいずれの動機づけも高い傾向があることが示された。

友人関係と他の活動においては、重要度に関わらず、内発低動機づけが最も高く、次いで高自己決定的外発的動機づけが高かったことから、重要度に関係なく、自律的に活動していることが推測される。重要度が低くても低自己決定的外発的動機づけが高いわけではなかったことから、重要度が低い場合は、価値を見いだせていないためではなく、単純に動機づけが弱いということが考えられる。自己効力感については、他の活動において最も重視している場合に、それ以外に比べ高かったものの、友人関係においては重要度による差はなく、領域の重要度とはあまり関係がないと考えられる。つまり、自律的に行っている活動と考えられる友人関係や他の活動においては、できるかどうかという期待においては、領域における活動を重視する程度による差異はほとんどないと考えられる。

## 2. 学業の重要度による差の有無

### 2-1. 達成目標

学業の重要度により4つの達成目標それぞれの強さに差が生じているかどうか、また個人内で4つの達成目標間の程度に差が生じているかどうかを検討するために重要度(1位・2位・3位)×目標(熟達接近目標・熟達回避目標・遂行接近目標・遂行回避目標)の二要因分散分析を行った。その結果、重要度の主効果( $F(2, 179) = 5.82, p < .01$ )、目標の主効果( $F(3, 537) = 52.82, p < .001$ )がともに有意で、重要度と目標の交互作用は有意ではなかった( $F(6, 537) = 1.26, n.s.$ )。主効果が有意であったので多重比較を行った。その結果、熟達接近目標が他の3つの目標よりも有意に高く、他の3つの目標間には有意な差は見られなかった。また、重要度が3位の場合に、1位、2位に比べ目標が低かった。1位と2位の間には有意差はなかった。

以上から、達成目標については、熟達接近目標が最も強く、他の3つの目標間の程度には差がなく、いずれの目標も重要度が高いほど強く持っている、と赤間(2012)と同様の結果が得られた。

### 2-2. 各領域の動機づけにおける学業の重要度の効果

#### 2-2-1. 自己効力感

各領域の自己効力感の強さについて、学業の重要度による差が生じているかを検討するために、重要度(1位・2位・3位)×領域(学業・友人関係・他の活動)の二要因分散分析を行った。その結果、重要度の主効果が有意ではなかった( $F(2, 179) = .47, n.s.$ )。領域の主効果( $F(2, 358) = 47.09, p < .001$ )、重要度と領域の交互作用( $F(4, 358) = 4.22, p < .01$ )がともに有意であった。交互作用が有意であったので下位検定を行った。重要度における領域の単純主効果の検定の結果、1位( $F(2, 358) = 3.08, p < .05$ )、2位( $F(2, 358) = 21.31, p < .001$ )、3位( $F(2, 358) = 39.74, p < .001$ )の全てにおいて単純主効果が有意であった。そのため、多重比較を行った結果、1位においては、学業と他の活動の間に有意差があり、他の活動における効力感の方が高かつ



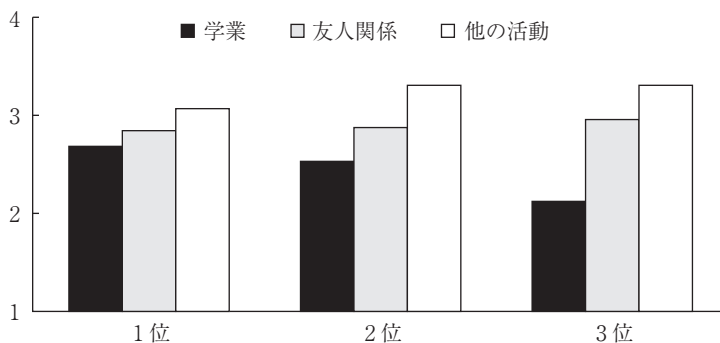


Figure1. 学業の重要度別の各活動領域における自己効力感

た。2位と3位においては、すべての領域における効力感の間に差があり、学業が最も低く、次いで友人関係、そして他の活動が最も高かった。領域における重要度の単純主効果の検定の結果、学業における効力感に対し、重要度の単純主効果が有意であったが( $F(2, 179) = 5.53, p < .01$ )、友人関係( $F(2, 179) = .26, n.s.$ )、他の活動( $F(2, 179) = .89, n.s.$ )においては有意な単純主効果は得られなかった。単純主効果が有意であったので多重比較を行った結果、学業効力感は、重要度が1位と2位の間に有意差はなく、3位が1位と2位よりも有意に低かった。

以上から、自己効力感は他の活動において最も高く、次いで友人関係、そして学業における効力感が最も低かった。また、授業の重要度は、学業領域以外の効力感には影響せず、学業領域では、1位と2位に位置付けている場合に比べ、3位の場合に低かった。

## 2-2-2. 自律性

学業の重要度により、学業だけではなく、他の領域の自律性の程度に差が生じているか、各領域内の自律性の異なる動機づけの程度の差の有無を検討するため、学業の重要度×領域×自律性の三要因分散分析を行った。その結果、重要度の主効果が有意ではなかった( $F(2, 179) = .59, n.s.$ )。領域

の主効果( $F(2, 358) = 19.26, p < .001$ ), 自律性の主効果( $F(2, 358) = 328.55, p < .001$ )が有意であった。重要度と自律性の交互作用は有意ではなかったが( $F(4, 358) = 1.37, n.s.$ ), 重要度と領域の交互作用( $F(4, 358) = 6.82, p < .001$ ), 領域と自律性の交互作用( $F(4, 716) = 72.92, p < .001$ )が有意であった。また重要性と領域と自律性の交互作用も有意であった( $F(8, 716) = 2.49, p < .05$ )。二次の交互作用が有意であったので, 下位検定を行った。

自律性の各水準における重要度と領域の単純交互作用の検定を行った。その結果, 内発的動機づけにおいて, 単純交互作用が有意であった( $F(4, 358) = 6.70, p < .001$ )。高自己決定的外発的動機づけに対しても単純交互作用が有意であり( $F(4, 358) = 5.69, p < .001$ ), 低自己決定的外発的動機づけに対して単純交互作用は有意ではなかった( $F(4, 358) = 1.27, n.s.$ )。

次に, 領域の各水準における重要度と自律性の単純交互作用の検定を行った。その結果, 学業において, 単純交互作用が有意であった( $F(4, 358) = 2.41, p < .05$ )。友人関係に対しても単純交互作用が有意であり( $F(4, 358) = 3.21, p < .05$ ), 他の活動に対して単純交互作用は有意ではなかった( $F(4, 358) = 1.13, n.s.$ )。

最後に, 重要度の各水準における領域と自律性の単純交互作用の検定を行った。その結果, 1位( $F(4, 716) = 18.51, p < .001$ ), 2位( $F(4, 716) = 20.29, p < .001$ ), 3位( $F(4, 716) = 40.59, p < .001$ ), すべての重要度において単純交互作用が有意であった。

単純交互作用が有意であったので, 単純・単純主効果の検定を行った。領域と自律性の各水準における重要度の単純・単純主効果の検定の結果, 内発的動機づけにおいては, 学業( $F(2, 179) = 5.13, p < .01$ ), 友人関係( $F(2, 179) = 5.23, p < .01$ )において単純・単純主効果が有意であり, 他の活動においては有意ではなかった( $F(2, 179) = .59, n.s.$ )。高自己決定的外発的動機づけ, 低自己決定的外発的動機づけのいずれにおいても重要度の単純・単純主効果は, 学業のみ有意であり(順に $F(2, 179) = 10.47, p < .001$ ;  $F(2, 179) = 4.73, p < .01$ ), 友人関係(順に $F(2, 179) = 1.66, n.s.$ ;  $F(2, 179) = .34, n.s.$ ), 他の

活動(順に  $F(2, 179) = .02, n.s.$  ;  $F(2, 179) = 1.17, n.s.$ )では有意ではなかった。

重要度と自律性の各水準における領域の単純・単純主効果の検定を行った。その結果、内発的動機づけ(1位 :  $F(2, 358) = 14.33, p < .001$ ; 2位 :  $F(2, 358) = 29.29, p < .01$ ; 3位 :  $F(2, 358) = 80.02, p < .01$ )、低自己決定的外発的動機づけ(1位 :  $F(2, 358) = 10.68, p < .001$ ; 2位 :  $F(2, 358) = 4.62, p < .01$ ; 3位 :  $F(2, 358) = 3.65, p < .05$ )においてはすべての重要度において、高自己決定的外発的動機づけにおいては重要度が3位( $F(2, 358) = 13.89, p < .001$ )においてのみ領域の単純・単純主効果が有意であり、1位( $F(2, 358) = .91, n.s.$ )と2位( $F(2, 358) = .42, n.s.$ )においては有意ではなかった。

重要度と領域の各水準における自律性の単純・単純主効果の検定を行った。その結果、すべての領域、すべての順位の組み合わせにおいて単純・単純主効果が有意であった(学業1位 :  $F(2, 358) = 20.36, p < .01$ ; 学業2位 :  $F(2, 358) = 58.67, p < .01$ ; 学業3位 :  $F(2, 358) = 19.49, p < .01$ ; 友人関係1位 :  $F(2, 358) = 55.80, p < .01$ ; 友人関係2位 :  $F(2, 358) = 144.97, p < .01$ ; 友人関係3位 :  $F(2, 358) = 162.60, p < .01$ ; 他の活動1位 :  $F(2, 358) = 44.02, p < .01$ ; 活動2位 :  $F(2, 358) = 70.69, p < .01$ ; 活動3位 :  $F(2, 358) = 7.87, p < .01$ )。

有意な単純・単純主効果が得られたため多重比較を行った。最初に領域と自律性における重要度の水準間の差について多重比較を行った。内発的動機づけにおいて学業では、1位と3位、2位と3位の間に有意差が見られ、1位と2位の間には有意差はなかった。1位と2位よりも3位が低かった。友人関係において、1位と3位、2位と3位の間に有意差が見られ、1位と2位の間には有意差はなかった。1位と2位よりも3位が高かった。他の活動においては、2位と3位の間に有意差が見られ、1位と2位、1位と3位の間に有意差はなかった。3位の方が2位よりも高かった。高自己決定的動機づけにおいて学業における1位と3位、2位と3位の間に有意差が見られ、1位と2位の間には有意差はなかった。友人関係、他の活動においては、重要度による有意差はなかった。低自己決定的外発的動機づけにおいては学業では1位と3位の間に有意差が見られ、1位と2位、

2位と3位の間には有意差は見られなかった。友人関係と他の活動においては重要度による有意差はかった。

以上から、学業領域の重要度によって、学業領域の動機づけについては、内発的動機づけ、高自己決定的外発的動機づけは、重要度が最も低い場合に他の順位に位置付けているよりも低く、低自己決定的外発的動機づけは、1位よりも3位が低かった。つまり、重要度が1位か2位である場合には、差はないものの、3位であった場合には自律性の程度に関わらず動機づけが低いことが示された。また、友人関係や他の活動における動機づけについては、自己決定の程度に関わらず外発的動機づけについては、学業領域の重要度による差は見られなかったが、内発的動機づけについてのみ、学業領域の重要度が最も低い場合に、他の活動において他の順位に位置付けた場合よりも高かった。

次に、領域の水準間における多重比較を行った。その結果、重要度が1位の場合、内発的動機づけにおいては、学業は友人関係と他の活動のそれぞれと有意差があり、友人関係と他の活動の間に有意差はなかった。学業は他の2領域よりも低かった。高自己決定的外発的動機づけにおいては領域間に有意差はなく、低自己決定的外発的動機づけにおいては、学業は友人関係と他の活動のそれぞれと有意差があり、友人関係と他の活動の間に有意差はなかった。学業は他の2領域よりも高かった。重要度が2位の場合、内発的動機づけにおいては、学業は友人関係と他の活動のそれぞれと有意差があり、友人関係と他の活動の間に有意差はなかった。重要度が1位の場合と同様に学業が他の領域よりも低かった。高自己決定的外発的動機づけにおいては領域間に有意差はなく、低自己決定的外発的動機づけにおいても領域間に有意差はなかった。重要度が3位の場合、内発的動機づけと高自己決定的外発的動機づけにおいて学業と友人関係、学業と他の活動の間に有意差が見られ、友人関係と他の活動の間に有意差はなかった。学業が他の領域よりも低かった。低自己決定動機づけにおいては、学業と他の活動の間にのみ有意差が見られた。学業が他の活動よりも高かった。

友人関係・課外活動の動機づけと学業の重要度、動機づけの関連の検討

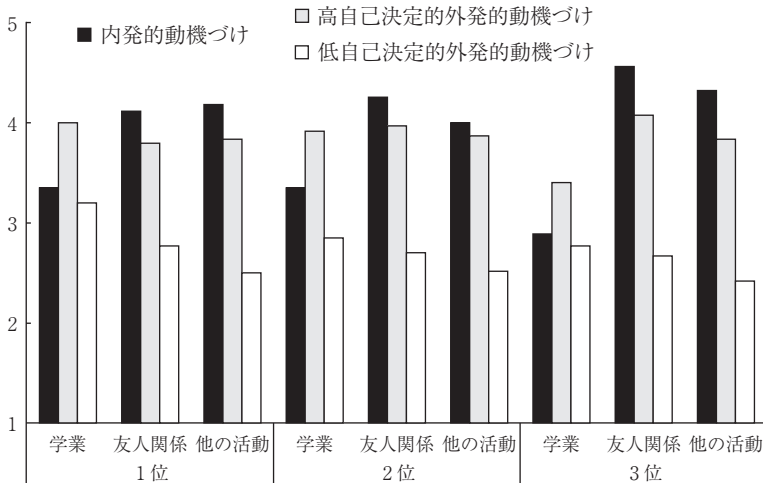


Figure2. 学業の重要度及び活動領域別の動機づけ

以上から、重要度とは関係なく、学業領域は他の領域よりも低自己決定的外発的動機づけが高く、内発的動機づけが低いことが示された。高自己決定的外発的動機づけは領域間に差はなかった。

授業の重要度と領域の各水準における自律性間の多重比較を行った。その結果、重要度が1位の場合、学業における内発的動機づけと低自己決定的外発的動機づけ、他の活動における内発的動機づけと高自己決定的外発的動機づけの間を除くすべての重要度、領域における自律性間に有意差が見られた。学業では、内発的動機づけと低自己決定的外発的動機づけよりも高自己決定的外発的動機づけが高く、友人関係では、内発的動機づけが最も高く、高自己決定的外発的動機づけ、低自己決定的外発的動機づけの順に低くなり、他の活動では、内発的動機づけ、高自己決定的外発的動機づけよりも低自己決定的外発的動機づけが低かった。2位の場合、他の活動における内発的動機づけと高自己決定的外発的動機づけの間を除くすべての重要度、領域における自律性間に有意差が見られた。学業では、高自己決定的外発的動機づけが最も高く、内発的動機づけ、低自己決定的

外発的動機づけの順に低かった。友人関係では、内発的動機づけが最も高く、次いで高自己決定的外発的動機づけ、低自己決定的外発的動機づけの順に低くなり、他の活動では、内発的動機づけ、高自己決定的外発的動機づけよりも低自己決定的外発的動機づけが低かった。3位の場合、学業における内発的動機づけと低自己決定的外発的動機づけの間を除くすべての重要度、領域における自律性の間に有意差が見られた。学業では、内発的動機づけと低自己決定的外発的動機づけよりも高自己決定的外発的動機づけが高く、友人関係と他の活動では、内発的動機づけが最も高く、次いで高自己決定的外発的動機づけ、低自己決定的外発的動機づけの順に低かった。

以上から、学業領域においては、2位の場合に、高自己決定的外発的動機づけが最も高く、次いで内発的動機づけ、そして低自己決定的外発的動機づけが最も低いという差が見られたが、1位と3位の場合には、内発的動機づけと低自己決定的外発的動機づけの差がなかった。友人関係においては重要度に関係なく、内発的動機づけが最も高く、次いで高自己決定的外発的動機づけ、そして低自己決定的外発的動機づけが最も低かった。他の活動については、重要度が3位の場合において、内発的動機づけが最も高く、次いで高自己決定的外発的動機づけ、そして低自己決定的外発的動機づけが最も低かったが、1位と2位の場合には、内発的動機づけと高自己決定的外発的動機づけに差がなかった。

### 3. 学業領域と他領域間の動機づけの関係

領域間の動機づけの関係について検討するために、学業の重要度別に学業領域の動機づけと他領域の動機づけの相関係数を算出した。重要度1位から3位のそれぞれについて Table2 から Table4 に示した。

重要度が1位の群においては、友人関係において低自己決定的外発的動機づけが高いほど、自己効力感が低いほど学業において遂行接近・回避の両目標、及び低自己決定的外発的動機づけが高かった(低自己決定的外発的

友人関係・課外活動の動機づけと学業の重要度、動機づけの関連の検討

動機づけ：それぞれ  $r = .46, p < .01, r = .60, p < .001, r = .37, p < .05$ ; 自己効力感：それぞれ  $r = -.38, p < .05, r = -.37, p < .05, r = -.40, p < .01$ 。また、他の活動においても低自己決定的外発的動機づけが高いほど遂行接近目標を持っており ( $r = .37, p < .05$ )、自己効力感が高いほど学業における自己効力感も高かった ( $r = .51, p < .001$ )。

重要度が2位の群においても、友人関係において低自己決定的外発的動機づけが高いほど、学業において遂行接近・回避の両目標、さらに熟達回避目標と低自己決定的外発的動機づけが高かった(それぞれ  $r = .48, p < .001, r = .59, p < .001, r = .37, p < .001, r = .51, p < .001$ )。また友人関係における高自己決定的外発的動機づけは学業における熟達接近目標、内発的動機づけ、高自己決定的外発的動機づけと正の相関関係にあった(それぞれ  $r = .38, p < .001, r = .35, p < .01, r = .39, p < .001$ )。また友人関係の自己効力感が高いほど

Table2. 学業領域の重要度が1位の場合の学業と他領域の動機づけ間の相関係数

	学 業							
	熟達接近 目標	熟達回避 目標	遂行接近 目標	遂行回避 目標	内発的 動機づけ	高自己決定的 外発的動機づけ	低自己決定的 外発的動機づけ	自己 効力感
友人関係								
内発的動機づけ	.21	.17	.29	.25	.19	.09	.26	.29
高自己決定的外発的動機づけ	.25	.08	.27	.13	.23	.02	.23	.19
低自己決定的外発的動機づけ	-.14	.24	.46**	.60***	-.23	-.01	.37*	.05
自己効力感	-.09	-.21	-.38*	-.37*	.24	-.02	-.40**	.24
他の活動								
内発的動機づけ	-.03	-.19	-.21	-.28	.34*	.04	-.24	.20
高自己決定的外発的動機づけ	.09	.01	.07	-.04	.07	-.07	-.05	-.10
低自己決定的外発的動機づけ	.04	.11	.37*	.28	.29	.16	.27	.04
自己効力感	-.03	-.10	-.13	-.23	.32*	.21	-.26	.51***

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

Table3. 学業領域の重要度が2位の場合の学業と他領域の動機づけ間の相関係数

	学 業							
	熟達接近 目標	熟達回避 目標	遂行接近 目標	遂行回避 目標	内発的 動機づけ	外発的 高自己決定的 動機づけ	外発的 低自己決定的 動機づけ	自己 効力感
友人関係								
内発的動機づけ	.26*	.25*	.25*	.21	.27*	.38***	.30**	.02
高自己決定的外発的動機づけ	.38***	.29**	.32**	.23*	.35**	.39***	.25*	.06
低自己決定的外発的動機づけ	.11	.37***	.48***	.59***	.10	.22	.51***	.16
自己効力感	.02	.11	.16	.17	.20	.12	.15	.39***
他の活動								
内発的動機づけ	.02	.06	.08	.08	.21	.08	.11	.14
高自己決定的外発的動機づけ	.14	.07	.07	-.11	.14	-.03	-.01	.23*
低自己決定的外発的動機づけ	.00	.16	.04	.15	-.05	.01	.12	-.07
自己効力感	.03	.02	.10	.11	.11	-.01	.01	.31**

\*p&lt;.05, \*\*p&lt;.01, \*\*\*p&lt;.001

Table4. 学業領域の重要度が3位の場合の学業と他領域の動機づけ間の相関係数

	学 業							
	熟達接近 目標	熟達回避 目標	遂行接近 目標	遂行回避 目標	内発的 動機づけ	外発的 高自己決定的 動機づけ	外発的 低自己決定的 動機づけ	自己 効力感
友人関係								
内発的動機づけ	.29*	-.06	-.03	-.02	.20	.29*	-.05	.01
高自己決定的外発的動機づけ	.35**	-.06	.06	.00	.23	.34**	-.06	.07
低自己決定的外発的動機づけ	.25	.28*	.17	.35**	-.03	.22	.44***	-.09
自己効力感	.15	.12	.15	.04	.36**	.09	-.07	.20
他の活動								
内発的動機づけ	.16	.05	.01	.10	.14	.09	-.08	-.02
高自己決定的外発的動機づけ	.18	.08	.07	.14	.19	.06	-.02	.08
低自己決定的外発的動機づけ	.14	.29*	-.03	.08	.00	.00	.28*	-.06
自己効力感	.16	.07	-.05	.10	.11	-.07	-.12	.21

\*p&lt;.05, \*\*p&lt;.01, \*\*\*p&lt;.001



学業における自己効力感も高かった( $r = .39, p < .001$ )。

重要度が3位の群においては、学業における高自己決定的外発的動機づけは熟達接近目標、高自己決定的外発的動機づけと(それぞれ  $r = .35, p < .01, r = .34, p < .01$ )、低自己決定的外発的動機づけは友人関係における低自己決定的外発的動機づけと正の相関関係にあった( $r = .44, p < .001$ )。また、友人関係の自己効力感が高いほど学業における内発的動機づけが高かった( $r = .36, p < .01$ )。

## 考 察

本研究では、学業、友人関係、他の活動、の3つの活動領域における大学生の動機づけの特徴、及び学業における動機づけと他領域の動機づけの関連を、授業の重要度別に検討した。

まず友人関係と他の活動における動機づけについて、学業において赤間(2012)が示したように、その領域を重視している程度によって動機づけの強さが異なるかどうかを検討した。その結果、友人関係に対する動機づけは、内発的動機づけが最も高く、次いで高自己決定的外発的動機づけ、そして低自己決定的外発的動機づけが最も低く、これは岡田(2005)とも同様の傾向であった。またその強さは、重要度が高いほど強い傾向があった。他の活動に対する動機づけも友人関係に対する動機づけと類似し、内発的動機づけが最も高く、次いで高自己決定的外発的動機づけ、そして低自己決定的外発的動機づけが最も低く、田中・山内(2001)で見られた傾向と一致していた。また、自己効力感については、友人関係においては重要度による差はなく、他の活動においても、1位の場合に2位、3位よりも高かったが2位、3位の間には差は見られなかった。

大学生にとっての学業が、単位の取得のために必要であるという側面を持つ活動であるのに対し、友人関係や他の活動は、自発的に始発し、終了することが可能な活動であるために、学業とは異なり内発的動機づけや高

自己決定的外発的動機づけが高い自律的な動機づけのパターンを示したの  
だろう。また、自己効力感については、友人関係においては重要度による  
差はなく、他の活動で最も重視している場合に、2位以下と比べ差が見ら  
れたのみであった。高い自律性を持って取り組んでいる活動であるために、  
重要度が高いか低いかということと効力感のようなできるかどうかという  
期待は関係がないのかもしれない。

学業における動機づけは、赤間(2012)と同様に、達成目標は熟達接近目  
標型の3つの目標よりも高く、他の3つの目標の程度は同程度であるとい  
うパターンが見られ、このパターンは重要度に関係なく同一であった。目  
標の強さは、重要度が最も低い3位の場合に、重要度を1位、2位に位置  
付けた場合よりもすべての目標において低かった。

自己効力感と自律性については、学業の重要度と領域間の差の有無を検  
討した。その結果、自己効力感は、学業においては重要度が最も低い場合  
に、1位、2位に位置付けた場合よりも低かったが、他の領域の自己効力  
感には学業における重要度による差は見られなかった。また、領域間の自  
己効力感の差については、学業における効力感ほどの重要度においても2  
領域に対する自己効力感よりも低かった。学業の重要度が2位、3位の場  
合には、学業に対する効力感が最も低く、次いで友人関係、そして他の活  
動が最も高かった。

達成目標と学業領域の自己効力感については、学業の重要度を最も低く  
位置づけている場合に低く、これは赤間(2012)と同様の結果であり、重要  
度が低いほど動機づけも弱いという結果であった。また領域間の効力感に  
ついては、学業の重要度にかかわらず学業における自己効力感が最も低く、  
他領域に比べ学業領域における自己効力感の動機づけ機能は低い可能性が  
ある。Bandura(1977)が述べるように、自己効力感は困難に直面した際の  
努力や持続性に影響する。自己効力感が低い場合は困難に対し、すぐにあ  
きらめてしまうことなどが考えられる。いくら学業が自身にとって重要で  
あると考えていても、効力感が低いことで、困難を経験することで取り組

むことをやめてしまうようでは十分な成果は期待できない。自己効力感を高めるには、自身の成功経験が最も大きな情報源であるために(Bandura, 1977)、学業において成功したと知覚できるような機会を設定することが求められるだろう。

学業の重要度の各領域の動機づけに及ぼす効果を検証した。その結果、全体的な特徴として、学業領域は他の領域に比べ、内発的動機づけが低く、低自己決定的外発的動機づけが高い傾向があり、高自己決定的外発的動機づけは同程度であった。学業領域では、高自己決定的外発的動機づけが最も高く、他の動機づけが低く、他の領域では、内発的動機づけ、高自己決定的外発的動機づけが高く、低自己決定的外発的動機づけが低かった。学業領域においては赤間(2012)同様に重要度が高いほど動機づけが強かったが、他の領域においては学業の重要度にかかわらず動機づけの強さは一定であった。このことから、学業を重視するほど、学業の価値を内在化することで動機づけられており、他の領域は価値の内在化と内発的な理由により動機づけられていると考えられる。また、高自己決定的外発的動機づけの程度に領域間の差がなかったことから、活動の価値の内在化の程度はこの活動においても同程度になされていると考えられる。また、学業の重要度が低く、動機づけが弱いからと言って、他領域の動機づけが強いということもなかった。つまり学業領域の重要度と他領域の動機づけは独立していると考えられる。そのため、学業における動機づけを高めるために重要度を高めることで、他領域の動機づけに影響はないと考えられる。従って、学業の重要性を高めることは学業領域における動機づけを高めるための方法の一つとして利用できるだろう。

学業の重要性は他領域の動機づけに影響していないと考えられるが、他領域の動機づけと学業領域の動機づけには相関関係が見られた。さらに学業の重要度によって領域間の動機づけの関係も異なっていたために他領域の動機づけも考慮する必要があるだろう。特に、重要度の高さに限らず友人関係における動機づけと学業における動機づけの関連が見られた。重要

度が1位と2位では、友人関係に対する低自己決定的外発的動機づけが高い場合、つまり、友人がいないと困る、などの理由で他者と関わっている場合に、また友人関係における自己効力感が低い場合、つまり友人関係を築くことに自信がない場合には、接近・回避の両遂行目標と学業に対する低自己決定的外発的動機づけが高かった。このことから、接近・回避にかかわらず遂行目標が自身の有能さの判断基準を他者との相対評価によって行うこと (Elliot & McGregor, 2001) を考えると、友人関係の構築に自信がなく、いないと困るという回避的な動機づけで友人関係を築いているほど、自身の有能感の判断基準として他者と関わっている可能性が考えられる。また学業に対しても低自己決定的な、つまり価値を認められず義務的に行っていると考えられる。これは重要度が2位の群においてもみられ、学業の重要度が高いとしても、友人関係における動機づけの自律性が低い場合には、学業においても自律性が低く、他者と比較することで有能さを判断する傾向が強まるのかもしれない。3位の群においても友人関係の低自己決定的外発的動機づけと学業の低自己決定的外発的動機づけと遂行回避目標の間に正の相関があり、友人関係に価値を見いだせずにかかわっている場合には、学業においても価値を見いだせず、他者比較による自己判断を行う傾向があると考えられる。重要度が2位の場合と3位の場合においては、友人関係に対する高自己決定的動機づけは、熟達接近目標や自律性の高い動機づけと正の相関があり、友人関係に価値を認められているほど、学業においても価値を認め知識の獲得を目指す傾向があると考えられる。これら外発的動機づけと達成目標の相関は、スポーツ領域という同一活動領域内ではあるが、藤田(2009)が示した、熟達目標と自律性の高い外発的動機づけが、遂行接近目標のような能力を示すことを目指す目標が自律性の低い外発的動機づけと正の相関関係にあることと類似している。本調査の結果のように、異なる領域間であっても自律性と達成目標に関連を示したが、他の活動における動機づけは学業における動機づけといくつかの弱い相関関係があったのみで、学業以外の領域ならばどのような領域の動機

づけであっても学業における動機づけと関係があるということではないのかもしれない。Tanaka, Okuno, & Yamauchi(2002)や赤間(2011)が示した社会的有能感や社会的勢力のような対人関係に関する要因が達成目標に影響していたように、友人関係という対人領域であることが重要なかもしれない。

友人関係と学業の動機づけの関係を授業の重要度別に見た場合、重要度が1位の群においては友人関係における自律性の低い動機づけとの関連は見られたものの、2位、3位の群のように自律性の高い動機づけと学業領域の動機づけの関連は見られなかった。このことは学業の重要性による動機づけの程度の違いが、1位と2位では、3位と比べた場合に少ないことを考えると、学業の重要度が最も高い状態であるのは必ずしも良いとは言えないのかもしれない。

本調査の結果、領域間の動機づけに関連があることが確認され、重要度による違いはあるものの、友人関係における動機づけが自律的であれば学業に対する動機づけも自律的である傾向が認められるものの、この領域間の動機づけの関係が何によって形成されているのかについては不明である。例えば、重要度の高い領域の動機づけがトップダウン的に、重要度の低い領域の動機づけに影響するのか、または特定の領域の動機づけが基礎となって他領域の動機づけに影響するのか、など領域間の動機づけの関連について詳細に検討することが必要である。領域間の動機づけの関係を明らかにすることによって、学業以外の領域においても動機づけを高めるための方法を考える際に役立つことができるだろう。

本調査の結果、学業に限らず友人関係や他の活動においても、自律性に基づく動機づけは領域の重要度が高いほど、強いものであることが示された。また、学業は高自己決定的外発的動機づけが強いが、友人関係や他の活動においても内発的動機づけも高く、自律性の高い動機づけを持って活動に関与していることが示された。また、学業を重視している程度は他の領域の動機づけには関係なく、独立していることが示され、学業の動機づ

けを高めるために学業の重要度を高めることは他領域の動機づけに悪影響を及ぼす可能性は低いと考えられる。そのため、学業の重要度を高めることは学業における動機づけを高めえるための一つの方法として利用することができるだろう。しかしながら、学業と他領域、特に友人関係における動機づけは無関係ではなく、自律性が高い場合には学業においても自律性が高く望ましい動機づけ状態であるが、自律性が低い場合には、本質的な理解よりも他者と比較し、目先の他者からの評価を重視する目標を持ちやすく、自律性も低い動機づけ状態であると考えられる。そのため、学業における動機づけに対し、友人関係の在り方、動機づけの状態なども考慮すること必要があるだろう。

#### 引用文献

- 赤間 健一 (2011). 目標志向性の誘意性次元における社会的勢力の影響 関西心理学会第123回大会発表論文集, 70.
- 赤間 健一 (2012). 動機づけから考える大学生にとっての授業 人間文化研究, 29, 125-151.
- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- Bandura, A. (1997). *Self-efficacy: the exercise of control*. New York: Freeman.
- Elliot, A. J., & McGregor, H. A. (2001). A 2 × 2 achievement goal framework. *Journal of Personality and Social Psychology*, 80, 501-519.
- 藤田 勉(2009). 体育授業における目標志向性、動機づけ、楽しさの関係 鹿児島大学教育学部教育実践紀要, 19, 21-60.
- 藤田 勉(2010). 体育授業における達成目標の接近回避傾向と社会的スキルおよび適応感の関係 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編, 61, 75-81.
- 長沼 君主(2004). 自律性と関係性からみた内発的動機づけ研究 動機づけ研究の最前線 北大路書房 pp.30-60.
- 岡田涼(2005). 友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討—自己決定理論の枠組みからパーソナリティ研究, 14, 101-112.
- 岡田 涼(2008). 親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルの構築 教育心理学研究, 56, 575-588.
- Tanaka, A., Okuno, T., & Yamauchi, H. (2002). Achievement motives, cognitive and social competence, and achievement goals in the classroom. *Perceptual and Motor Skills*, 95, 445-458.

友人関係・課外活動の動機づけと学業の重要度、動機づけの関連の検討

田中あゆみ・山内弘継(2002). 4つの達成目標と学業遂行, 努力の関連性 教育心理学会第44回総会発表論文集, 257.

田中希穂・山内弘継(2001). 動機づけが well-being に及ぼす影響 日本心理学会第64回大会発表論文集, 904.

VandeWalle, D., Cron, W. L., & Slocum, J. W. (2001). The role of goal orientation following performance feedback. *Journal of Applied Psychology*, 86, 629-640.

**謝辞**

本研究は科学研究費助成事業(若手研究(B) No.23730635 研究課題:「大学生の動機づけ調整スタイルの検討」)による研究の一部である。